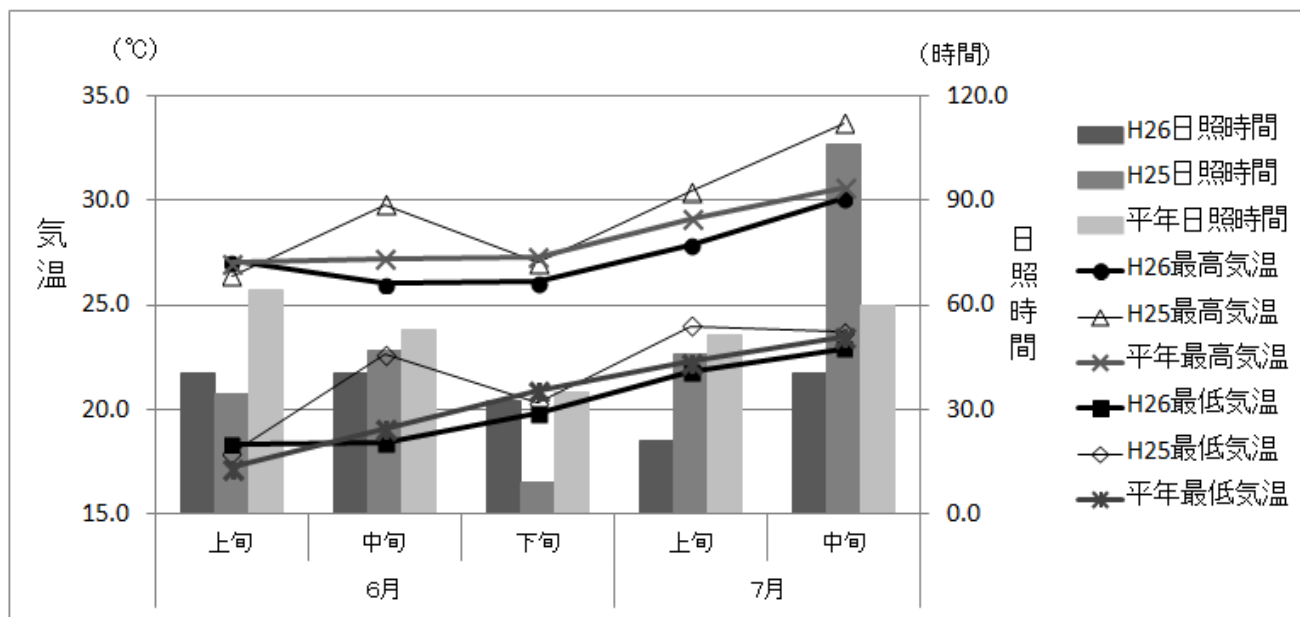




- ◇ 作型に応じた充実した苗づくりを心がけましょう。
- ◇ 低温処理前には、「うどんこ病」や「ハダニ類」等の防除を徹底しましょう。

今年、梅雨入りが6月2日(平年より3日早い)、梅雨明けが7月21日(平年より2日遅い)でした。その期間は、最高気温、最低気温ともに平年より低く、7月の日照不足の影響で葉の展開が遅く、根の張りも悪いため、葉かぎ作業が遅れているほ場が見受けられます。今後、苗の回復が遅れて、充実していない場合は、作型を遅くするなど苗の充実具合に応じた作型の選択が必要です。

病害虫では、これから「炭そ病」の汚斑症状が発症しやすくなります。また、「ハダニ類」や「カキノヒメヨコバイ」、「アブラムシ類」、「うどんこ病」の発生も見られています。梅雨明けが遅かった分「うどんこ病」が遅くまで残る恐れがありますので、注意して下さい。



作型と苗の管理

作型の選択

- クラウン径が8mm未満の苗は、無理して早い作型にせず、苗の充実を優先させる。
- うどんこ病の発生が見られる苗は、遅い作型に使用する。
- 作型は、厳寒期の出荷増と春期の収穫ピーク軽減のため、低温処理作型と普通ポットを組合せ、2~4作型を導入する。
- 労力分散のため、作型は栽培面積が大きいほど多く組み合わせる。

「あまおう」の作型別、処理期間と定植日及び収穫開始の目安

作 型 (予冷库利用)	入 庫	出 庫	定植日	陽光処 理	収穫開始
株冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日	3回	11月上旬
株冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日	2回	11月中旬
株冷Ⅴ型	9月 1日	9月19日	9月19日～	1回	11月下旬
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日		11月上～中旬
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日	—	11月中旬
夜冷Ⅴ型	9月 1日	9月19日	9月19日～		11月下旬
普通ポット			9月20～25日	—	12月上～中旬
普通晩期(厳寒期安定出荷を目的)			9月26～28日	—	12月下旬

肥培管理

クラウン径が8mm以上に充実した苗を育苗目標とする。

- 根傷みしている場合は追肥(置肥)を控え、根が回復するまで葉面散布を行う。
- 根傷みしている場合は、発根促進剤を施用する。
- 各作型に応じて最終追肥時期(表2)を決め、計画的な施肥を行う。
- 育苗後半の肥料切れは、1 番果房の着果数減少や早進株の発生の原因となるので、作型に合わせて極端に切れ過ぎないように注意する。

最終追肥時期の目安

作 型	3.5寸鉢	3寸鉢
夜冷(8月中下旬処理開始)	処理 10日前	処理 5日前
株冷Ⅲ型(8月18日入庫)	8月 1日	8月 5日
株冷Ⅳ型(8月23日入庫)	8月 5日	8月10日
株冷Ⅴ型(9月1日入庫)	8月10日	8月15日
普通ポット	8月25日	8月30日

かん水

- 鉢土の乾き具合を常に観察して、過湿にならないようにかん水量を調整する。
- かん水は午前中を中心に行い、夕方には鉢土の表面が乾く程度にする。
- 寒冷紗を被覆すると鉢土が乾きにくくなるため、乾き具合を見てかん水を調整する。

葉かぎ

- 1回当たりの摘葉数は2枚以内とする。
- 苗の葉数が、3～4枚になるようにする。
- 生育が悪い時や降雨時・直前は摘葉しない。
- 葉かぎ前と葉かぎ後は、必ず「炭そ病」の防除を行う。
- 最終摘葉の後は、「ハダニ類」「ヨトウムシ類」及び「炭そ病」の防除を必ず行う。

【最終の葉数及び最終の適葉時期の目安】

作 型	最終適葉時期	摘葉時葉数
株 冷	入庫10～15日前	3～3.5枚
夜 冷	夜冷処理開始前	3.5枚
普通ポット	8月30日頃	4枚

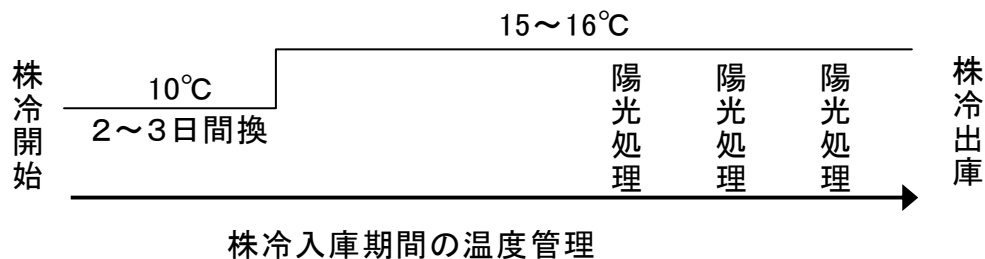
【株冷入庫10日前の体内窒素濃度による管理】

体内窒素濃度	対 策
25ppm 以下	葉面散布 2回:OKF-1 1,000 倍、メリット青 500 倍など
25～100ppm	葉面散布 1回:OKF-1 1,000 倍、メリット青 500 倍など
100～250ppm	かん水のみ
250～500ppm	PK剤の葉面散布 1～2回 2～3日前に 100ppm 以下になっているか再調査する
500ppm 以上	遅い作型に変更する

花芽分化促進

【株冷処理】

- 株冷処理の間に苗が消耗するため、充実した苗を使用する。
- 株冷入庫時に葉柄中の窒素濃度が 25～50ppm になるよう、肥培管理を行う。
- 冷蔵庫内の湿度に注意し、湿度90%以上になるようにする。特に、冷風が直接当たる部分は乾きやすいので、ダンボールや厚紙で風よけをする。
- 高温年には入庫前に寒冷紗で被覆して、苗の温度を下げる対策も必要となる。



<陽光処理>

- ◇ 株の消耗を抑えるため、入庫15日前後に1回目を行い、その後2～3日間隔で計3回程度行う。
- ◇ 晴天日に苗を庫外に出し、日光に当てる。出庫時間は1日8時間以内とし、乾燥しないようにかん水を行う。
- ◇ 再入庫は、冷蔵庫内の温度上昇を防ぐため、株の温度が下がった夕方(午後6時頃)に行う。

【夜冷処理】

- 処理期間中に肥料切れしないよう、処理開始時には適当な濃度（試験紙判定で 150ppm 程度）の体内窒素を確保する。
- 入庫時の庫内温度は $13^{\circ}\text{C} \pm 2^{\circ}\text{C}$ とする。
- 入出庫時間の目安は、午前10時に在庫、午後6時に入庫する。
- 気温が高い場合、入庫が早いと庫内の温度が下がりにくいため、入庫時刻を遅くする。
- 処理期間中には、かん水や薬剤散布は行わないが、摘葉はしない。
- 日中、極端な高温（ 35°C 以上）になる場合には、花芽分化が遅れることがあるので、寒冷紗による遮熱を行う。

【普通ポット】

- 花芽分化促進のため、8月下旬より寒冷紗被覆を行う。ただし、うどんこ病が発生している場合は、寒冷紗被覆により通風が悪くなると感染を助長するので、通風に注意する。

病害虫防除

炭そ病

- 育苗期間中は定期的な防除を行う。特に、葉かぎ前後の防除を徹底する。
- 発生株、葉に病斑を確認した株及びその周辺株をすみやかに除去する。
- 株冷の陽光処理や夜冷の日光処理中に夕立などの降雨があった場合は、葉の水滴がなくなるまで入庫しない。株冷の場合、翌日の早朝に入庫する。
- 雨よけ育苗では風通しを良くし、高温、過湿にならないようにする。

うどんこ病

- うどんこ病の症状がある苗は入庫しない。
- 不要な下葉を除去した後に、薬剤散布を行う。
- うどんこ病の孢子発芽適温は 20°C 前後なので、うどんこ病の病斑が見られる苗は低温処理せずに作型を遅らせ、葉かぎで病斑がある葉が取り除かれてから定植する。

ハダニ類

- 発生が多い場合は、葉の展開が遅れ、苗の生育が悪くなる。
- 低温処理開始までに必ず防除を行い、ハダニの発生の無い状態で入庫する。
- 葉かぎ後に、薬液が葉裏に十分付着するように散布を行う。

※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、天敵に影響の長い農薬を使用しないよう注意する。

ハスモンヨトウ

- 心葉を食害するため、心葉に薬液がかかるように散布する。
- 入庫中にも食害を受けるため、入庫前に必ず防除を行う。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！